

大学生の障害者に対するイメージに関する研究

大嶋 葵 (生涯スポーツ学科 地域スポーツコース)

指導教員 中道 莉央

キーワード：障害，障害者，イメージ

1. 緒言

2020年に東京でのパラリンピック開催が決まり、パラリンピックを含む障害者スポーツは様々なメディアで注目されるようになった。しかしながら、2016年に起きた相模原障害者施設殺傷事件に見るように社会全体として障害者へ理解が進んでいるとは言い難い。

そこで本研究では、これからの社会を担う大学生が障害者にどのようなイメージを抱いているのか、障害者のイメージや環境を良くしていくにはどのような改善が必要か等、障害理解に資する基礎的知見を得ることを目的とする。

2. 研究方法

本研究では、B大学とD大学の大学生(516名)を対象にアンケート調査を行った。内容は徳珍・藤田(2005)を参考に障害者(身体/知的/精神別)のイメージ等に関する35問、障害者の認知や理解に関する11問を設定した。回答は主に5件法によって得た。

3. 結果と考察

1) 障害者のイメージと交流機会

障害者と聞いてイメージする障害種では、身体障害が多く(3.39±0.82)、身体障害、知的障害、精神障害という順にポジティブなイメージを持つ傾向にあることがわかった。精神については、交流経験のある人の方がネガティブなイメージを持つことがわかった。これはどうしたら良いか分からないまま関わることで余計に関わることの難しさを感じてしまった結果ではないかと考えられた。

2) 障害者との交流について

障害者に対して手助けや気軽に会話ができない理由として、「どうしたら良いか分からない」という意見が多かった(身体3.96±0.71, 知的3.69±0.83, 精神3.61±0.85)。また、障害者差別解消法を知っている人ほど、社会において障害者に対する差別があると認知していた(p=0.01)。このことから障害や支援法について適切な知識を深めることが重要であると考えられ、障害者本人による講演会や交流等の機会を求めていることがわかった。その一つとして、スポーツを通じた交流の可能性が示唆された。

表1 障害者と一緒にスポーツがしたいか

身体	知的	精神	有意差
3.36±0.82	3.18±0.79	3.14±0.83	身-知, 精**

**：p<0.01

しかしながら、「一緒にスポーツをしたいか」では、身体と知的及び精神との間に有意な差異が認められた(p=0.01)。今後は、学校教育において障害者本人との交流機会の増加、特に知的・精神障害者スポーツについて触れる機会を設けることが重要であると考えられた。

4. まとめ

本研究では大学生の障害者に対するイメージを明らかにしたが、今後は様々な年代の人や障害者本人を対象にすることで、共生社会に向けた障害理解の課題や必要な改善策をより明確にすることができるだろう。

主な引用・参考文献

徳珍温子・藤田大輔(2005)女子学生・生徒の「身体的」障害者イメージについての一考察. 大阪信愛女学院短期大学紀要, 39: 9-20.